**花の王 ボタンについてー日本、中国、欧米ボタンの歴史と文化**

**平成31年1月12日**

**島根大学名誉教授　　細木高志**

1. **日本のボタン(*Paeonia suffruticosa*)**
2. **奈良時代の「出雲風土記」に現れる漢字表記の「牡丹」は、平安時代の「本草和名」によれば、別名が「ヤマタチバナ」や「フカミグサ」であり、これはヤブコウジを指すと考えられている。ただし「フカミグサ」の名は平安時代中期には観賞用のボタンにも使われた。**
3. **薬用ボタンは、7世紀以後に遣唐使が、または平安時代初期（9世紀）に弘法大師が中国から日本に伝えたとする俗説があるが、証拠資料はない。**
4. **観賞用ボタンは、平安時代9世紀末に、菅原道真が国分尼寺に栽植されている白牡丹を見て漢詩で詠んだのが最初。以後、ボタンは10世紀の「蜻蛉日記」や「枕草紙」に書かれ、和歌や漢詩にもしばしば詠まれた。**
5. **日本最古の造園書の「山水抄」（12世紀末から13世紀初）にボタンなど 各植物の庭に植えるべき位置が示された。**
6. **室町時代には南禅寺などの寺院や庭園でのボタンの栽植が多く見られ、漢詩にも詠まれた。「牡丹屏風絵」からは花弁数が数十枚の淡桃色と赤色種があったことが分かる。**

**(6）安土桃山時代にはボリーム感がある大きい花で、白、赤、桃色のボタンが**

**が絵画に多く見られる.**

**(7)江戸時代には300以上の品種が「花壇地錦抄」(伊藤伊兵衛、三之丞)（1695)**

**に記載され、十数弁ー数十弁を有す花（八重咲き、千重咲き）は観賞価値が高いとされ、中国ボタンに多い100弁以上の品種（万重咲き）は極めて少なかった. また「花譜」（貝原益軒）（1694）には栽培記事や実生の発芽方法も書かれた。さらに冬咲きの寒牡丹は、1663年 (寛文3年）の俳書に見られ、以後、現在まで20-30品種が現れる。**

**（8）ボタンの植物に関して、江戸前期の狩野（加納）重賢は「草木写生」を**

**描いたし、江戸後期には「牡丹花譜」や「牡丹真写」に品種の彩色図が**

**載った。ボタンの襖絵などは多数あり、十数弁から数十弁の花が狩野派、酒**

**井抱一、伊藤若冲や葛飾北斎らの画家により描かれた。**

**(9)ボタン生産地は、明治時代には大阪府(池田)と兵庫県(宝塚)であったが、大正から昭和時代にかけて新潟が加わり、戦後は島根県・大根島で生産が増え、昭和40年頃からは日本最大産地となり観光も盛んとなった。また同島では昭和初期から始まったボタン苗の欧米への輸出が現在も続いている. ただし日本のボタン苗の輸出は明治20年代に始まり、大正ー昭和期には横浜植木株式会社が新潟ボタンを集めて行っている。また中国ボタンの輸入は宝塚・山本のボタン農家が明治末-大正期に行った。　明治ー大正期に盛んであった池田や宝塚のボタン生産は昭和初期まで続いたが、戦後にはなくなった。**

 **(10)明治期には白、赤、紫色品種の他に黒色品種も見られ、花色の種類は現存**

**品種と同じ程度に多彩になった。**

**(11)繁殖には、明治半ばからシャクヤク台に接ぎ木する方法 が普及して、ボタ**

**ンの自根共台に比べ増殖効率が高まった.　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（12）新品種作出は、江戸期より現在まで、主に実生より行われたが、枝変わ**

**り・突然変異により花弁の切れ込みや細い渦弁になる品種、赤に白縞入る品**

**種、葉の斑入り品種もできた. さらに近年、黄牡丹（*Paeonia lutea*）の黄色**

**品種と牡丹（*Paeonia suffruticosa*）の白色品種を交雑して、花首が立つ黄**

**色雑種品種‘黄冠’もできた.**

**2.中国のボタン**

**(1)中国牡丹は、原種の矮牡丹（*Paeonia suffruticosa* var.*spontanea*）、紫斑牡丹（*P.papaveracea＝P.rockii*）、揚山牡丹（*P.ostii*）、卵葉牡丹（*P.qiui*）などの野生種が関与してできた。**

**(2)薬用としてボタンは「神農本草経」（1-3世紀）に書かれた.**

**(3) 唐代初の蘇敬の「新修本草」（659年）によれば「牡丹」の異名として「百**

**両金」が載り、この異名の植物の形態・生態の説明から「牡丹」はヤブコ**

**ウジ属植物（ヤブコウジ、マンリョウ、カラタチバナ）の可能性が大きい。**

**(4)唐代には宮中から始まったボタン観賞が、民衆にも広がり牡丹ブームとなり花王と呼ばれ、都の長安での栽培が盛んになった。また寺院のボタン園で自然交雑による実生から、重弁花ができ花直径も20cm超える品種もできた。花色も白、桃、紫（黒に近い濃紫もあり）、淡黄色、暈しなど豊富になった。絵画では、女性の頭上に重弁の牡丹花の簪飾りの絵が描かれている。**

**(5)北宋代には洛陽での牡丹栽培が盛んになり、中国牡丹独特の万重盛り上がり咲きができた。また実生から得られた秀花選抜株の芽を野生牡丹に接ぎ木することで繁殖効率が高まった。「牡丹記」には栽培法・育種・利用などが書かれ、品種数は100を超えた。また花色も淡紅、紫、黒紫、淡黄色など多彩となった。 さらに北宋末に突然変異と思われる淡緑色品種‘豆緑’が白牡丹から生じた. 花型は単弁型から、花弁数が増えるにつれ、蓮型、菊型、牡丹型になり、中国牡丹独特の盛り上がり咲き扁球型、円球型（皇冠型）、長球型、綉球型に発達した。**

**(6)南宋代には四川省天彭での栽培が多くなり、この時代（12-13世紀）までに現在見られるすべての花型や花色が出揃そろった。南宋末-元代の絵画で見ると、重弁の平咲き、重弁の盛り上がり咲きの両型の牡丹が描かれている。**

**(7)明代には安徽省亳州と山東省曹州（菏沢）に栽培が移り、「牡丹記」には274種が挙がられ、品種の形態、花色、実生栽培、株分け、接ぎ木、潅水、施肥、医薬方面などで科学的な解説が記された。また冬季に牡丹を開花させるのに、土蔵に株を入れて周りを温める促成開花技術が進んだ。美術品では、絵画や皿絵に盛り上がり咲き牡丹が描かれている。**

**（8）清代には山東省菏沢で生産栽培面積・花農家数が増えたが、この他に黒竜省から江西省まで牡丹栽培が広がった。また促成開花が進み、牡丹は冬季の室内装飾品（鉢花）になった。絵画を見ると、白、赤、桃、紫色の盛り上がり咲ボタン花が図鑑のように正確に描かれた。**

**(9)清代以後現代までは山東省菏沢が牡丹栽培の中心で、一重、八重、千重、万重があり、花型は平咲き（蓮型、菊型、バラ型、牡丹型）と盛り上がり咲き（偏球型、円球型＝皇冠型、長球型、綉球型）あり、花色も南宋代から見られた９大色系が出揃った。育種面では混合花粉による人工交雑も行われ、600-700以上の品種ができている。観光面では、毎年4月下旬になると菏沢のみならず洛陽や北京の牡丹公園に多くの花見客が訪れて観光も盛んである。**

**3.欧米のボタン**

 **(1) 中国ボタンのヨーロッパへの最初の導入は、18世紀末に植物収集家のJ.Banksにより行われ、19世紀半ばには植物学者・収集家のR.Fortuneにより多数の中国ボタン秀花品種が輸入されて、ヨーロッパで普及した。**

**（2）日本ボタンのヨーロッパへの最初の導入は、19世紀半ばにP.F.B. von Sieboldにより行われ、その後19世紀末-20世紀初には日本から苗業者により輸出された。日本ボタンは八重でも花首が垂れず、種子もできやすかったので以後の欧米交雑の親にしばしば利用された。**

**(3)中国ボタンの成立に関わった1原種の矮牡丹は、20世紀前半に採取され*P.suffruticosa* var.*spontanea*と欧米で名付けられた。また同じ頃に、中国ボタンの一部に関わった紫斑牡丹（花弁基部に紫斑有す）*P.papaveracea*(=*P.rockii)*も収集された。**

**(4)欧米ボタンの片親なった原種、*P.lutea*(黄牡丹)は1883年、*P.delavayi*（紫牡丹）は、1984年に中国雲南省で宣教師のP.J.M.Delavayにより発見された。**

**(5)フランスのL.HenryとE.Lemoineは、20世紀前半に主に中国品種（一部日本品種）を花粉親として、*P.lutea/ P.delavayi*を種子親にしてかけ合わせ、従来にはなかった黄色牡丹品種群(一部は暗赤色)を作出し、日本でも‘金閣’や‘金晃’などの名が付く黄色牡丹が販売されている。**

**（6）アメリカのA.P.Saoudersは、20世紀半ば、主に稔性が強い日本の一重や半八重品種の花粉を*P.lutea*や*P.delavayi* にかけて、多数のアメリカSaouders F1雑種品種群（花色黄色、暗赤色、真珠色など6群、日本牡丹の血50％含む）を作出した。**

**(7)Saouders F1雑種は、ほとんど不稔であったが2個体が稔性を有し、彼の業績引き継いだアメリカのN.Daphnisは、20世紀中-後半、これらのF1雑種を自殖したり、日本・中国ボタンに戻し交雑を1-2回を行い、F1だけでなくF2、F2、BC1、BC2、BC3を作出して、花首が立つ剛直な黄色、橙色、暗赤色、藤色のDaphnis雑種品種群を出した。現在、観賞価値高い新タイプのボタン（日本・日本の血を50-87.5％含む）として普及しつつある.**

**講師プロフィ－ル**

**細木高志（ほそき　たかし）**

**略歴**

**1947年　　京都市生まれ**

**1969年　　京都大学農学部農学科卒業（蔬菜花卉園芸学専攻）**

**1971年　　京都大学大学院農学研究科専攻・修士課程修了**

**1972年　　ハワイ州立大学園芸学科博士課程入学**

**1975年　　同課程修了「熱帯植物の組織培養による繁殖」のテ－マで**

**pｈＤ（博士）取得**

**1975年　　京都大学農学部助手**

**1981年　　島根大学農学部助教授**

**1986年　　「揮発性イオウ化合物による園芸植物の休眠打破**

**に関する研究」で アメリカ園芸学会賞受賞**

**1992年　　島根大学農学部（現・生物資源科学部）教授**

**2005年　　「花卉の組織培養による培養系の確立と大量増殖に関する研究」**

**のテーマで 園芸学会・学術賞受賞**

**2008年　　島根大学退職　島根大学名誉教授**

**学会活動　　　園芸学会シンポジウム委員（1989-1995）**

**園芸学会雑誌編集委員（1988-2001）**

 **園芸学会評議員（2002-2004、2006-2008）**

 **園芸学会中四国支部長（2002-2004）**

**主な研究内容 1.バイテクによる園芸植物の大量増殖と遺伝子組み換え**

**2.園芸植物の形態、生態および遺伝子による品種分類（ボタン、**

**シャクヤク、グラジオラス、サクラ、クレマチス、マクワウリ)**

**3.ボタンの開花調節**

**4.園芸植物の休眠打破物質に関する研究**

**著書（主要4編のみ）**

 **1.「熱帯観葉・花卉および有用作物」. 第2章.各種植物のクロ**

**－ン増殖法. p138-151. クロ－ン植物大量生産の実際技術（田中隆荘編）シ－エム－シー（株）.東京.(1985).**

 **2.「ボタン」花木編. 15・主要花木（低木編）. pp143-148. 朝**

**日園芸百科.朝日新聞社. 大阪. (1985)**

**3.「ボタンとシャクヤクの原種の解説」.pp230-235.**

**現代日本の牡丹・芍薬大図鑑（日本ぼたん協会編）.**

**講談社. 東京. (1990)**

**4.「歴史・設備・器材・準備」4.マイクロプロパゲーション.**

**pp82-91.園芸種苗生産学（今西英雄・田中道男代表）**

**朝倉書店、東京.(1997).**

**現在.**

**1.「伝統園芸植物の原種と品種発達の歴史」で園芸学会発表中、および同テ－マ（ボタン、シャクヤク、グラジオラス、サクラ、クレマチス、マクワウリ)で‘農業および園芸’（養賢堂）に連載記事執筆。**

**2.フラワ－ソサイエティー・園芸大学運営委員・花アブストラクト編集委員**

**3. 京都府立植物園・京都園芸倶楽部の理事**

**4.園芸相談員(京都府立植物園、大阪市・咲くやこの花館、大阪市・長居公園)**